

バーリントン・ファイン・アーツ・クラブとジャポニスム —19世紀末イギリスにおける浮世絵版画受容についての一考察—

桑 和 沙

はじめに

19世紀後半の西洋において、浮世絵版画が新しい表現を求める芸術家たちの関心を集め、ジャポニスムと呼ばれる現象が生まれたことはすでによく知られている。だが、西洋における大規模な浮世絵展の歴史が、1888年にロンドンのバーリントン・ファイン・アーツ・クラブというジェントルマンズ・クラブが主催した「日本の木版画の歴史を例示する版画・版本展」を起点とすることは、従来のジャポニスム研究では、ほとんど論じられてこなかった¹。この大浮世絵展が契機となって、コレクターの増加や美術館への収蔵が活発になった。さらにフランスにおいては、この展覧会に大きな影響を受けた「日本版画展」が1890年に開催され、浮世絵への熱狂は最高潮に達することとなる。

それでは、こうした浮世絵収集熱が起こる発端となったバーリントン・ファイン・アーツ・クラブ主催の浮世絵展は、いかなる経緯で開かれたのだろうか。誰が関わり、どういった背景があったのか。本稿では、1888年の画期的な浮世絵展をとりまく時代的・社会的状況に注目することで、19世紀末イギリスにおける浮世絵版画受容の一端を描く。

1. 紳士による紳士のための展覧会

バーリントン・ファイン・アーツ・クラブは、「芸術、とくに版画や素描に関心を持つ」紳士を中心に構成された会員制のクラブである²。その会員には、19世紀イギリスを代表する美術批評家のジョン・ラスキン、画家のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティやフレデリック・レイトン、ジェイムズ・マクニール・ホイッスラーなど、錚々たる面々が名を連ねていた。蒐集家のためのクラブと銘打ったこのクラブでは、定期的に会員のコレクションを中心とした展覧会が開催され、まだ当時は評価の定まっていない珍しい作品が展示されることも少なくなかった。冒頭の浮世絵展もまた、1888年に「お雇い外国人」として来日経験のあったウィリアム・アンダーソンを中心に組織され³、会員のコレクションから、9世紀から開幕当時までの日本の版画史を辿るという画期的な展覧会だったのである。

クラブの活動について述べる前に、その成り立ちに触れておこう。19世紀半ばまでに、ロンドンには、多種多様なジェントルマンズ・クラブが相次いで創設された⁴。上流階級に限らず、紳

士を自負する男性の多くは、まず社交クラブに入会し、次いで政治・芸術・職業に関わるクラブなど、複数のクラブに所属するのが通例となっていたからである⁵。芸術に関連したものとして、たとえばアーツ・クラブ（Arts Club、1863年創設）やアセニウム（Athenaeum、1834年創設）、ガリック（Garrick、1831年創設）などは、いずれもこの分野に関心のある紳士が集う会員制のクラブとして知られていたが、実際のところ「芸術」は建前に過ぎなかった。本来、共通の趣味や関心事を持つ男性会員同士の社交空間であったはずのクラブは、自らの社会的階級とジェンダー・アイデンティティを強固にする「イヴ不在のエデンの園」⁶としての役割が期待される一方で、実際には、どのクラブも中身はさほど代わり映えせず、会員に図書室やダイニング・ルーム、喫煙室、会議室などの施設やサービスを提供する場となっていたのだった。

バーリントン・ファイン・アーツ・クラブは、まさにこうしたアート・クラブの現状に不満を抱いていた美術愛好家を中心となり、「愛好家、蒐集家、美術に関心のある人々が集うことを目的として」⁷、1866年4月に設立された会員制クラブであった。クラブの名前は、ロイヤル・アカデミーが入居するバーリントン・ハウス近くに構えたクラブハウス（ピカデリー177番地）に由来している⁸。1870年に、活動の拠点を新しいクラブハウス（サヴィル・ロウ17番地）へ移すと、1870年に建築家で、会員のマシュー・ディグビー・ワイアットがその改修を手がけ、モーニング・ルームや委員室、ビリヤード・テーブルのある娯楽室、図書室、そのほかジェントルマンズ・クラブに必要な機能が備え付けられた。現存するクラブの写真（図1）は、後年になって撮影されたものであるが、室内のデザインは当時多くのジェントルマンズ・クラブで好まれた伝統的かつ重厚で抑制された雰囲気をもとものとなっている⁹。クラブハウスの室内デザインは、『アート・ジャーナル』のような美術雑誌においても「ロンドンクラブの装飾」といった連載記事が組まれるほど、美術愛好家たちの関心事のひとつとなっていた¹⁰。バーリントン・ファイン・アーツ・クラブもまた、男性会員たちにとって理想的な佇まいのクラブハウスを構え、一般的なジェントルマンズ・クラブと同等のサービスを会員たちに提供した¹¹。同クラブの最大の特徴は、会員の企画による展覧会を行ない、定期的に会合を開催するなど、会員間の交友の機会を積極的にもうけたことであった。こうした独自の取り組みもあって、1866年の発足当初から、同クラブの会員には、当時の芸術界を代表する顔ぶれがそろっている¹²。

クラブ主催の展覧会は、第二次世界大戦が本格化する1940年までの間に、公式のものだけでも100回以上開催されたとされる¹³。展覧会には、会員やその友人たちから借用した美術作品からなる「通常展」と、専門委員会によって企画、運営される「特別展」の二種類があり、いずれも費用はクラブの資金から支出された。「特別展」では、後述する浮世絵展を含め、非会員やクラブとは直接関係のない機関から作品を借用することもあった。なかには、ヴィクトリア女王や王宮、カンタベリー大司教、フランスやドイツの国立美術館、オックスフォード大学やケンブリッジ大学などから作品を借り受けた展覧会もあったという¹⁴。さらに、特別展は会員の紹介があれば、女性を含めた一般鑑賞者も訪れることができた。このように、展覧会は美術館さながらの注力の仕方で行われたが、その一方で存命の芸術家の展覧会は実施しないというクラブ独自の規約も設けられていた。これは、多くの芸術家がクラブの会員に名を連ねていたことにくわえて、ロイヤル・アカデミーが主催する展覧会や、近隣の商業的なギャラリーとの差別化をはかる狙いがあったと考えられる。来場者が1万人を超えるものから、200名を下回るものまで、反響は様々

であったが、展覧会のたびに専門委員会によってカタログが発行され、会員や展覧会の協力者はもちろん、図書館や博物館、他のクラブなどに配布された。このようにして、名士たちが集うバーリントン・ファイン・アーツ・クラブが主催する特別展は、ときに美術館や博物館主催の展覧会にも匹敵する影響力を放つこととなるのである。

2. 1880年代のロンドンの美術界におけるジャポニスム

バーリントン・ファイン・アーツ・クラブが浮世絵展を開催した1880年代末のイギリスは、25万人が訪れた「日本人村」の開業（1885年1月－4月）や、これが追い風となって1885年以降各地で上演された、ギルバート&サリバンによるオペレッタ『ミカド』の影響もあり、日本趣味が最高潮に達した時期でもある¹⁵。ロンドンの百貨店では、室内装飾品として日本の工芸品を買い求める主婦たちが押し寄せるなど、日本への関心はミドルクラスの女性たちを巻き込んだ流行現象と化した¹⁶。一方で、男性コレクターの間では、日本の芸術を学術的に探求しようとする動きが活発となる。とりわけ首都ロンドンでは、日本に関連した展覧会が相次いで行われた。ロンドンのこうした状況について、地方紙『グラスゴー・ヘラルド』は次のように客観的視点をもって報じている。

日本美術の潮流はロンドンで着実に大きくなっている。多くの人が、いったいどこから日本美術が際限なく一挙にやってくるのかと当惑しているに違いない。〔中略〕大英博物館での素晴らしい展示、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブでの厳選されたコレクション、ファイン・アーツ・ソサエティでの金工とファイアンスの展覧会がすでに行われた。そして今日、日本の絵画や素描などの別の展覧会がボンド・ストリートにある日本美術協会の新しい展示室で公開された¹⁷。

この記事が掲載された1888年は、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブだけでなく、大英博物館やファイン・アーツ・ソサエティなど、複数の日本美術関連の展覧会がほぼ同時期に行われていたことがわかる。イギリスでは、第2回ロンドン万国博覧会の日本部門（1862年）以降、日本美術のコレクション形成がフランスなどの周辺国に先駆けて行われたこともあって、1880年代には国内にあるコレクションだけでも、日本美術展が開催されるまでになっていた¹⁸。【資料1】に示したのは、1880年代末にロンドンで行われた日本関連の展覧会を一覧にまとめたものである。バーリントン・ファイン・アーツ・クラブの浮世絵展の特色を浮かび上がらせるためにも、同時期に、具体的にどういった日本美術展が行われていたのか、概観しておこう。

1888年にまず先陣を切って行われたのは、1月から2月にかけて、ファイン・アーツ・ソサエティで行われた「日本美術展」であった。カタログの序文には、この展覧会の貢献者として、54名のコレクターの名前が記載されている。このなかには、L・アルマ＝タデマやF・レイトン、モーティマー・メンペスといった画家や、W・アンダーソン、マーカス・ヒューイッシュ、トーマス・カトラーなどの日本美術に関する著述家としても知られた面々、さらには、ジャポニスムの発展にきわめて重要な役割を果たしたビング¹⁹ら、日本通として高い知名度を持つ者が多く含

まれていた。こうした国内外のコレクターから借用した美術品は全部で800点を越え、ヒューイッシュと日本美術研究家としてロンドンを拠点に活動していた片岡政行によって²⁰、磁器と陶器、甲冑・刀・鐔からなる金工、根付や置物などの木工と象牙細工、七宝、漆芸、ブロンズ、袱紗や着物といった織物に大別された上で、展示された。50名を超える出品者がありながら、浮世絵版画や絵画作品を展示しない理由について、ヒューイッシュは、「パーリントン・ファイン・アーツ・クラブと大英博物館で、本と絵画の重要な展覧会が行われる」ためであると述べている²¹。

ここでヒューイッシュが言及した大英博物館の展覧会とは、1888年2月から3月にかけて、同博物館の版画・素描ギャラリーで開かれた「中国・日本絵画展」のことである。この展覧会では、1881年にアンダーソンが大英博物館に売却した3000点を越える中国と日本の絵画コレクションのなかから、275点が展示された²²。展覧会は、第1部の絵画（掛幅・卷子・額）と第2部の線描画（絵巻断簡・扇面画・下図・画帳）からなる。前者には「10-16世紀の中国絵画」、「大和・土佐派」、「中国派」、「雪舟派」、「狩野派」、「民衆派」、「光琳派」、「四条派」、「岸駒派」の絵画作品135点、後者には、「大和・土佐派」、「中国派」、「狩野派」、「民衆派（浮世絵流）」、「四条派」の素描作品140点といったように、それぞれ流派別に分類された上で展示された²³。この展覧会については、すでに加藤弘子の研究によって詳細に論じられ、第1部と第2部ともに、走獸画を含む花鳥図が半数以上を占めていたことが明らかにされている²⁴。なお、「民衆派（浮世絵流）」の項目では、菱川師宣、宮川長春、英一蝶、葛飾北斎、歌川広重といった絵師の名が上げられているものの、この展覧会とほぼ同時期に行われたパーリントンの展覧会を意識してか、出品数はわずか10点にとどまっている²⁵。

一方、このように相次いで開催された日本美術展に商機を見出し、営利目的の展示を行なうギャラリーも少なくなかった。たとえば、1888年3月にロンドンのニュー・ボンド・ストリートに移転したばかりのジャパニーズ・ギャラリーでは、「9世紀から19世紀にかけての日本の一流芸術家による日本の絵画、素描展」が行われている。経営者のトーマス・ジョセフ・ラーキン は、1870年代に日本に滞在し、通信省で「お雇い外国人」として働いていた人物である²⁶。カタログでは、「大英博物館が研究を盛り上げ、知識を広め、一般大衆の関心を掻き立てた直後に」展覧会を開催することで、日本滞在中に自ら入手した「今世紀の巨匠とより著名な芸術家の希少価値のあるコレクションを所有していること」を示したかったと述べている²⁷。同じくジャパニーズ・ギャラリーでは、同年6月にも「特別に精選された作例展—漆・象牙・木彫・ブロンズ・象嵌・金工・陶器・磁器・七宝・絵画・織物・多種多様の美術品—」を開催している。ロンドンのナショナル・アート・ライブラリーに所蔵されている展覧会カタログは、1857年から1890年まで、サウス・ケンジントン博物館美術図書館長であったロバート・ヘンリー・ソーデン・スマイスに宛てた招待状とともに保管されている（図2）。このカタログには、価格表が付属しているのだが、このうちもっとも高額なのは、大阪の芸術家「ハルイ」による180cmを超える「金漆の象嵌細工のキャビネット」で、600ポンドもの高値がつけられている²⁸。

さらに、1880年代後半になると、日本美術展だけでなく、実際に日本へ赴いた画家の展覧会も注目を集めた。その先駆的な例が、1888年2月にダウズウェル・ギャラリーで行われたメンペスの展覧会である。雑誌『アカデミー』は、この展覧会の開催について、以下のように伝えている

る。

日本の大流行、もしくは日本の猛威は、依然としてさらに供給されることだろう。ファイン・アート・ソサエティでの日本の品々、博物館での日本の品々、そしてパーリントン・クラブで今週開幕する日本の版画の歴史を紹介する展示に加えて、ダウズウェルズでは現在、メンペス氏の昨年の日本に関する個人的な記録の展示の準備を進めている²⁹。

オーストラリア出身のメンペスは、イギリスで師弟関係にあったホイッスラーの影響もあって日本への関心を深め、1887年に8ヶ月にわたり日本各地を旅して、その様子を水彩画に描きとめた。出品作のひとつである《茶の花》(図3)では、茶屋の女性たちが腰を下ろして果物の皮むきをする様子が描かれている。画面前景に配置された看板や木の間越しに、本作の主題である茶屋で働く女性たちを捉える構図は、浮世絵版画を意識したもののだろうが、画中に描かれた提灯や立看板、吊下げ旗がはためく様子は、実際にメンペスが日本滞在中に魅了された光景だったようだ³⁰。この展覧会について、『マガジン・オヴ・アート』は、「若きオーストラリアの芸術家モーター・メンペス氏に任されたのは、日の出る国の習慣、風景、子供の生活、そして地域性とともに、日本を小さく風変わりな額に入れ、ロンドンに持ってくることだったのだ」³¹と評した。このように、メンペスの描いた日本の情景は、実際には日本へ足を踏み入れたことのない者が大半だったなかで、愛好家たちの想像力をより一層掻き立てたにちがいない。なお、このメンペスの展覧会が好評を博したダウズウェルでは、同年5月にも、横浜にあったドイツ系商社アーレンス商会の創業者H・アーレンスが日本で蒐集した掛物の展覧会を開催している。

このように、1888年1月から3月までの3ヶ月間に、日本に関する展覧会が5つも行なわれるほど、日本に関する美術展はロンドンにおいて活況を呈していた。まさにこの間に掲載された『パンチ』誌のカリカチュア、《ロイヤル・アカデミーの日本派》(図4)は、前述の『アカデミー』誌が指摘するところの「日本の猛威」がロンドンの美術界の中枢にまで行き渡っていたことを示すものといえよう³²。

3. 西洋における初の浮世絵展

日本の美術品は、1880年代末のロンドンにおいて、もはや稀少品ではなくなりつつあった。こうしたなか、パーリントン・ファイン・アーツ・クラブが企画したのは、浮世絵版画に特化した展覧会であった。1860年頃から、多くの芸術家や美術批評家が浮世絵版画に言及していたものの、その歴史全般を顧みようとする研究は、意外にも1888年の時点では存在しなかった³³。つまり、「日本の木版画の歴史を例示する版画・版本展」と題されたこの1888年の浮世絵展は、前節で確認した工芸品や絵画を主体とする日本美術展とは一線を画すものであると同時に、イギリス国内のみならず、世界的にも初めての試みだったのである。

とはいえ、浮世絵展は会員たちの関心が徐々に高じたことで実現したものであった。クラブのアーカイヴによると、この展覧会は、「日本の漆器展」(1875-76年)、「中国と日本の美術展」(1878-79年)に次いで、クラブが主催した三度目の日本関連の展覧会であったとされる³⁴。「日

本の漆器展」については、カタログの所在が確認できないため詳細は不明であるが、遅くとも1870年代後半には、日本美術への関心がクラブの会員間で共有され、展覧会の開催に至ったことは確かである。とくに「中国と日本の美術展」には、1888年の浮世絵展以上に、多くの会員が展覧会に関わっていた。カタログに掲載された貢献者一覧には、A・W・フランク、T・カトラー（非会員）ら日本美術の研究者、ラファエル前派の画家ヴァル・プリンセプや建築家ジョージ・エイチスンなど、総勢60名の名前が掲載されている。なお、1888年の展覧会で中心的な役割を果たしたアンダーソンは、日本の海軍省の要請を受けて、1873年10月から80年1月まで、海軍医学学校の教師として、東京に滞在中であったため、貢献者一覧には掲載されていない。1878年の「中国と日本の美術展」のカタログを見ると、出品物の多くは、画家フランク・ディロンのコレクションを中心に構成されていたことがわかる。F・ディロンは、ロイヤル・アカデミーで学び、世界各地を旅した経験をもとに異国情緒あふれる作風で知られた画家であった。日本には、1876年から1877年にかけて滞在し、帰国の翌年に《迷い込んだ羽根》(図5)という日本を主題とした作品を発表している。羽子板の羽根を探す少女に誘われるように、描かれた室内に注目すると、写實的に描写された掛軸や刀、陶磁器、蒔絵の膳、蜀台などが目に留まる。1878年の「中国と日本の美術展」には、ディロンが日本で手に入れたという「日本の芸術家による素描」(図6)をはじめ、会員のコレクションから屏風、掛軸、卷子、陶磁器、漆芸、根付、七宝などが展示された。しかし、1888年のファイン・アーツ・ソサエティの展覧会の序文でヒューイッシュが指摘するように、ディロンが編んだカタログは、「年代順・学術的あるいは何らかの分類もなければ、その借用に先立って何も体系的な記事のない」もので、出品作品の分類・整理はされておらず、展覧会は会員のコレクションを一同に並べただけに過ぎなかった³⁵。

しかし、それから10年の歳月を経て、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブでは、日本美術に関する研究書やコレクションの拡充もあって³⁶、単なる会員のコレクションの寄せ集めではなく、特定のテーマを掲げた展覧会を行なえるまでになっていた。展覧会はアンダーソンを中心に組織されたが、このほかに、1878年の日本美術展で中心的な役割を担ったF・ディロン³⁷、その息子で1873年から1878年まで日本の造幣局に勤めたエドワード・ディロン、日本文学研究者のフレデリック・ヴィクター・ディキンズ（非会員）、駐日公使を務めたアーネスト・サトウ（非会員）³⁸、装飾芸術誌『ステューディオ』の創刊者チャールズ・ホーム（非会員）、水彩画家のジョージ・プライス・ボイス、建築家のリチャード・フェネ・スパイアーズ、ホルマン・ハントとロセッティの友人であったヘンリー・ヴァーチャー・テップス³⁹、ホイッスラーをはじめ芸術家のパトロンとして知られたウィリアム・クレバリー・アレクサンダー⁴⁰が、各々の所有する浮世絵や版本のコレクションを提供している。

展覧会に出品された全662点のうち、大半はアンダーソンのコレクションで構成されている。後述するように、アンダーソンは、通史的に作品を紹介できるよう、鳥居清信の初期の役者絵から、幕末・明治期の開化絵に至るまで、幅広く出品していた。なお、奥村政信『遊君仙人』(図8)など当時の展示作品のうち数点は、現在大英博物館に所蔵が確認できる。アンダーソン・コレクション以外について見てみると、北斎の作品を好んで蒐集したというアレクサンダーは、『北斎漫画』など計18点⁴¹、サトウは鳥居清長や勝川春潮(図9)の浮世絵版画など15点、F・ディロンは『北斎画式』など6点、その息子E・ディロンは、日本で勤務していた際に購入した

岡田春燈斎の銅版画（図10）など比較的新しい作品を中心に38点、スパイアーズは河鍋暁斎の戯画など9点、書籍コレクターであったテップスは幸野樗嶺『樗嶺百鳥画譜』など9点、ディキンズは『人物海外小伝』（原文ママ）など7点、出品点数は不明であるが、ホームは歌川国貞や勝川春泉の錦絵などを出品していた。クラブハウスの一室という展示スペースを考慮したのか、展示室内には22個もの展示ケースが設置され、そのなかに250点以上の版本が展示されるなど、一枚絵だけでなく版本が多く出品されているのが、この展覧会の特徴である。ただし、カタログの作品リストの記述は具体性に欠ける部分も多いため、特定できた出品作品はごく一部にとどまり、その全貌は現時点で明らかでない。継続して出品作を特定してゆく必要があるだろう。

4. 展覧会の内容とその反響

クラブが前回行なった1878年の日本美術展では、60名程の会員が関わっていたものの、1888年の浮世絵展は、アンダーソンを中心に日本通で知られた数人の会員によって組織されたものであった。それもあって、展覧会の趣旨は明確である。展覧会の開催目的について、アンダーソンはカタログの序文で次のように述べている。

ヨーロッパで実践されてきた木版画芸術は、そこから枝分かれする各芸術の全てについて余すところなく研究がなされてきた。しかしながら中国と日本の木版術は、より古くから存在しており、おそらく〔ヨーロッパの木版画に対する〕直接的な親子関係にあるので、この分野の歴史に関わるあらゆる議論の方向性を導く資格がある。だが我々にとっては最近まで、ほとんど忘れ去られていたものである。本展覧会の目的は、東洋の我々の兄弟たちが独自に作り上げたとみなすべき芸術において、彼らがどれほどの卓越性を築き上げたのかを示すこと、そしてまた同時に、彼らが我々から借用したステンシル印刷、銅版画および石版画と同種の制作法を見事に用いたことを浮き彫りにすることにある⁴²。

このように、展覧会の最大の目的は、1888年の時点で体系的な研究のなかった日本の浮世絵版画について、通史的に概観することにあった。それでは、アンダーソンはどのような時代区分で作品を分類し、展示したのだろうか。【資料2】に示したのは、アンダーソンによる日本の版画史の時代区分とそれぞれの出品作品をまとめたものである。

アンダーソンは、日本版画の歴史の源泉を中国から伝来した版本に見いだし⁴³、第1期（9世紀-1608年）・第2期（1608-1680年）・第3期（1680-1710年）・第4期（1710-1765年）・第5期（1769-1825年）・第6期（1825-1860年）・第7期（1860年以降）に分類したうえで、各時代を代表する絵師による作品を展示している。出品者たちのコレクションの傾向も関係しているだろうが、もっとも多くの作品が展示されたのは、第5期（1769-1825年）、次いで第6期（1825-1860年）に分類された絵師によるものであった。アンダーソンはこの時期を「日本の色刷版画が隆盛を誇った時代」として⁴⁴。この時期に活躍した絵師のなかでも、とりわけ高く評価したのが、北斎である。北斎を「新しい時代を連想させ、卓越した」絵師であるとし⁴⁵、自ら出品した『富嶽百景』のほか、『北斎漫画』や『東遊』などの版本を数多く展示していた。1895年

には、自著『日本の木版画－その歴史、技術、特性』のなかで、「ヨーロッパで最初の北斎についてのコメントは、アンダーソン名で出された1878年の『日本アジア協会報告』に登場する」と述べている⁴⁶。こうした「北斎礼賛」の浮世絵観は、アンダーソンに限ったことではなく、1880年代の西洋における日本美術愛好家に広く見られるものである⁴⁷。しかしながら、日本の版画史を整理し、そのなかに特定の絵師を位置づけようとする姿勢は、イギリス国内のみならずフランスやアメリカなどの愛好家に先駆けたものであった。

この展覧会は、1888年2月から4月にかけて行なわれ、この間に1406名の来場者を記録している⁴⁸。1878年の「中国と日本の美術展」の来場者数が2835名であることを考慮すると、決して多いとはいえないものの、浮世絵をまとまった形で通史的に紹介した展覧会は、鑑賞者に強い印象をもたらしたようだ。たとえば、詩人のウィリアム・コスモ・モンクハウスは、『アカデミー』誌において、壁面に役者絵や美人画などの浮世絵版画、「非常にたくさんの」ガラスケースに版本が並べられ、もっとも目立つマントルピースに、北斎の作品が展示されていた様子など、展示風景について事細かに綴っている⁴⁹。さらに、彼自身が感銘を受けた作品については、こう記していた。

展覧会のもっとも魅力的な特徴を形成しているのは、壁面の「一枚絵の」色刷木版である。西村重長やその弟子石川豊信の女性たちの集団を描いた比較的初期の作品のいくつか（10番と12番）は、芸術的な感覚や色彩の繊細な組み合わせに魅力がある。しかしながら、もっとも美しいのは、春潮（14番と52番）のモザイク画のような調和である。彼のデザインでは、その配置や線の美しさもまた注目に値する⁵⁰。

ここでモンクハウスは、西村重長や石川豊信、勝川春潮といった比較的初期の浮世絵師の名を挙げながら、その色づかいや描写を称えた。さらに、展示作品だけでなく、展覧会にあわせて発行されたカタログもまた、『ロンドン・イヴニング・スタンダード』紙において、「ウィリアム・アンダーソンによる綿密かつ学究的な序文」が付されていると高い評価を受けている⁵¹。

さらに、同時代作品への影響という点で言えば、この展覧会の出品者のひとりであったホームは、展覧会の開幕直後にロイヤル・インスティテューションで「イギリスのデザインにおける日本美術の影響」と題した講演会で、次のように語っている。

我が国の壁紙の製造業者たちは、材質の特性やデザインの特徴に関して、日本人からいくつかの示唆を得てそれを取り入れてきた。だが、もっとも有益なヒントを受け取ってきたのは、我が国の画家や挿絵画家である。ウォルター・クレイン氏、グリーンハウエイ女史、故コールデコット氏による色鮮やかな子供向けの絵本は魅力的だが、それらの絵本の着想源は、100年以上前から日本人が色彩版画で用いてきた表現方法にある。ほんの30年ほど前まで、色彩版画はイギリスではほとんど知られていなかったということを思い起こさなければならない。色彩が本の挿絵に用いられるときには、手作業で色付けしなければならなかったのだ。ウォルター・クレイン氏が最近になって述べたことだが、日本の古い多色刷り木版画をいくつか見る機会を得て、はじめて彼は色彩を平坦に扱うことの価値に気づき（彼はおと

ぎ話のための挿絵でこれを一度試したことがある)、さらにそうした多色刷り木版画はそれ以来我が国における色彩版画芸術に多大な影響を与えてきた⁵²。

ホームのこの指摘は、クレインやグリーンハウエイの作品に見られる日本の影響について言及したもっとも早いもののひとつである。その後、ホームは、1893年に『ステューディオ』誌を創刊し、そこで浮世絵版画を含む日本の造形表現を折に触れて取り上げ、イギリスにおけるデザインの向上に努めることとなる。1888年の浮世絵展が、個々の芸術家にもたらした影響については、別途調査が必要である。しかし、パーリントン・ファイン・アーツ・クラブに、多くの芸術家やパトロンたちが所属していたことを考慮すると、浮世絵展は、イギリスにおける浮世絵版画研究やコレクション形成のみならず、同時代作品の造形表現にも及んでいる可能性は十分にあるだろう。

おわりに

男性の知識人や愛好家たちが自らのコレクションを出品するという形式や展示作品の時代区分は、1888年の浮世絵展の翌年に、起立工商会社の支配人としてニューヨークに滞在していた執行弘道がグローリエ・クラブで行なった「日本の浮世絵版画と版本展」⁵³、1889年にブリュッセルの「芸術文芸クラブ」でビングが開いた「日本絵画・版画展」⁵⁴、1890年にビングを中心にフィリップ・ビュルティやエドモン・ド・ゴンクール、ルイ・ゴンスらがコレクションを出品した「日本版画展」⁵⁵など、以後西洋で行なわれた浮世絵版画の展覧会でも踏襲されることになる。さらに、多くの版本が展示されたパーリントンの展覧会は、ホームが指摘したように、同時代の挿絵画家への影響についても検討の余地がある。

このように、パーリントン・ファイン・アーツ・クラブの「日本の木版画の歴史を例示する版画・版本展」は、歴史的に見ても非常に重要な展覧会であった。しかし、冒頭で述べたとおり、ジャポニズムの受容史研究においては、長らく等閑視されてきた。これは、先行研究が日本美術の紹介の場としての役割を、もっぱら万国博覧会や公的な博物館・美術館に見出してきたことと無関係ではない。むしろ、万国博覧会のような国家的な行事は、ジャポニズムの動きが広範なものとなる重要な動因となったのは確かだが、本稿で確認したように、個人経営のギャラリーなどを含めれば、1880年代後半のロンドンでは、日本美術展が活発に行われている。とりわけパーリントン・ファイン・アーツ・クラブが企画した展覧会は、西洋におけるジャポニズムの展開に重要な役割を果たした著名な男性の芸術家・美術批評家・コレクターによって構成され、同時代の浮世絵評価に影響を及ぼした展覧会であるという点でも看過できないものである。さらに、1880年代以降の公的な博物館・美術館におけるコレクションの充実は、こうした状況下で形成されたジャポニズムの第一世代の個人コレクションの寄贈・売却の上に成り立っていたこともまた、忘れてはならない。

本稿では、1880年代後半にロンドンで行われた日本美術展を概観しつつ、主にパーリントン・ファイン・アーツ・クラブ主催の「日本の木版画の歴史を例示する版画・版本展」がいかなる目的と経緯で開催されたのかという点に注目した。展覧会に出品された作品の特定や、コレクショ

ン形成に関して、会員間で相互的な影響関係があったのかといった点については、引き続き調査を行い、稿を改めて論じることにはしたい。

附記

本稿の執筆に際して、仲町啓子先生より貴重なご助言を賜りました。末筆ながらここに記し、心より御礼申し上げます。なお、本研究は、科学研究費助成事業・若手研究（研究課題／領域番号：19K13008）「バーリントン・ファイン・アーツ・クラブとジャポニスム—展覧会、交遊、男性性」の研究成果の一部です。

註

- 1 クラブの成り立ちと60年に及ぶ活動の変遷については、ステイシー・ピアソンが2017年に発表した以下の研究書で初めて明らかとなった。だが、定期的に行われた企画展の内容や会員同士の交遊など、今後取り組むべき課題も多い。とくにジャポニスムの流行を受けて、会員のコレクションを中心にたびたび開催された日本美術展については、本書では言及されていない。Stacy J. Pierson, *Private Collecting, Exhibitions, and the Shaping of Art History in London: the Burlington Fine Arts Club* (Basingstoke: Routledge, Taylor & Francis Group, 2017).
- 2 *Draft History of the Burlington Fine Arts Club* (London: Burlington Fine Arts Club, [1895]), n.p. 本資料を含め、バーリントン・ファイン・アーツ・クラブ（以下 BFAC）に関する一次資料の一部は、ロンドンのナショナル・アート・ライブラリーに保管されている。
- 3 ウィリアム・アンダーソン（1842-1900）は、ロンドンのセント・トマス病院で外科研修医、解剖学実験の助手として勤務したあと、1873年10月、30歳のときに日本の海軍省からの要請を受けて、海軍医学校の教師として日本へ派遣された。1880年1月の任期満了までの6年間を日本で過ごし、この間に莫大な俸給を投じて美術品の蒐集に努めた。
- 4 ロンドンだけでも200近くのクラブが存在し、会員制クラブのなかには、350名から多いもので2500名近くの会員数を誇るものもあった。Amy Milne-Smith, *London Clubland: A Cultural History of Gender and Class in Late Victorian Britain* (New York: Palgrave Macmillan, 2011), pp.28-29.
- 5 こうした複数のクラブの会員であることは、ヴェブレンの言う「顕示的閑暇」あるいは「顕示的消費」の対象として、有閑階級の紳士に欠かせない教養や眼識の証左として捉えられていた。ソースティン・ヴェブレン [高哲男訳] 『有閑階級の理論—制度の進化に関する経済学的研究』ちくま学芸文庫、1998年、88-89頁。
- 6 Milne-Smith, *op. cit.*, p.2.
- 7 前身となるファイン・アーツ・クラブは、1856年にサウス・ケンジントン博物館（現在のヴィクトリア&アルバート博物館）の学芸員ジョン・チャールズ・ロビンソンによって創設され、しばらくは同博物館を拠点とし、装飾芸術への興味と知識の発展を目指していた。しかし会員数の増加にともない、当初の設立目的は希薄となっていく。バーリントン・ファイン・アーツ・クラブ（BFAC）は、こうした状況に危機感を持った一部の会員たちが中心となって設立されることとなった。Pierson, *op. cit.*, pp.4-6.
- 8 クラブハウスは、王立水彩画家協会やコルナギ（Colnaghi）といった商業的なギャラリーのほか、古美術商やクリスティーズのようなオークションハウスに囲まれた場所にあった。このようなロンドンの芸術の中心地に、クラブハウスを構えたこともまた、クラブの展覧会活動や会員のコレクション

- 形成にも少なからず影響を与えたことが推測される。
- 9 「空間のジェンダー」がインテリア・デザインに及ぼした影響については、拙著『美と大衆—ジャポニスムとイギリスの女性たち』ブリュッケ、2016年、182-193頁を参照されたい。
 - 10 1899年の『アート・ジャーナル』では、ジ・アーツ・クラブ (The Arts Club)、ザ・リフォーム (The Reform)、ジ・アセニウム (The Athenaeum) といったジェントルマンズ・クラブのクラブハウスの特集記事が組まれている。
 - 11 1871年の時点で、入会金は5ポンド5シリングで、このほかに年会費として5ポンド5シリングが徴収された。会員たちは、クラブハウスにもうけられた図書室やビリヤード・ルームを利用したり、レストランで食事をとることができた。Pierson, *op. cit.*, p.8. なお、ナショナル・アーカイヴの通貨換算ツールによれば、1871年の5ポンド5シリングは、2017年の貨幣価値に換算した場合、およそ328ポンド(約48000円)に相当する。*The National Archive: Currency Converter: 1270-2017*, <http://www.nationalarchives.gov.uk/currency-converter/> (2019年10月3日アクセス)
 - 12 たとえば、創設当初からの会員として、ジョン・ラスキンや大英博物館の学芸員オーガスタス・ウォラトン・フランクス、その後1866-1867年に入会した会員に、D・G・ロセッティと弟で批評家のW・M・ロセッティ、F・レイトン、O・ジョーンズ、J・M・ホイッスラーらの名前が確認できるまた、E・バーン＝ジョーンズやW・モリス、R・フライなども同クラブに所属していた。Pierson, *op. cit.*, pp.167-186.
 - 13 *Ibid.*, pp.164-168. 本書には、付帯資料として、BFACが主催した展覧会一覧およびその来場者数が掲載されている。
 - 14 *Ibid.*, p.11.
 - 15 日本人村については、以下文献に詳しい。倉田喜弘『1885年ロンドン日本人村』朝日新聞社、1983年、および、小山騰『ロンドン日本人村を作った男—謎の興行師タナカー・ブヒクロサン1839-94』藤原書店、2015年。
 - 16 叡和沙、前掲書、175-182頁。
 - 17 Anon., “Our London Correspondence: The Budget Proposals”, *The Glasgow Herald* (Tuesday, March 27, 1888), p.7.
 - 18 小野文子、「近代における西洋での日本美術展— [イギリス]」『近代画説』26号、明治美術学会、2017年、17頁。
 - 19 在英コレクターを中心とする本展にあえてパリを拠点に活動したビングの名前が挙がっているのは、ファイン・アーツ・ソサエティの取締役社長で、『アート・ジャーナル』の編集長でもあったヒューイッシュの計らいによるものだろう。彼は、1888年5月にビングが仏・英・独の三ヶ国語で創刊する雑誌『芸術の日本』(*Le Japon artistique*)の英語版の編集を担当するなど、親交があった。
 - 20 片岡政行は、1886-1896年頃までロンドンを拠点に活動し、自らを日本の「プリンス」と自称して、「薩摩焼とその偽物」(“Satsuma Ware and its Imitations”, *The Magazine of Art*, 1890) といった日本美術関連の著作を執筆するなど、イギリスの日本美術愛好家の間ではよく知られた存在であった。在英中は博物学者の南方熊楠とも親交があり、彼の日記にもしばしば登場している。しかし、帰国後まもなく詐欺罪で逮捕され、その後の消息は不明である。
 - 21 Marcus B. Huish, “Introduction”, *Catalogue of, and Notes upon the Loan Exhibition of Japanese Art Held at the Fine Art Society's, 148, New Bond Street, London, 1888* (London: Fine Art Society, 1888), p.4.
 - 22 アンダーソンは、再びイギリスを離れる可能性がある一方で、コレクションの散逸を防ぐためにも一括してイギリスに保管し、公開してほしいという趣旨の手紙を大英博物館の館長に送り、自身の中国と日本絵画コレクションの売却を持ちかけている。ただし、実際にはイギリスを離れておらず、その

可能性があったかどうか定かではない。

- 23 *British Museum. Dept. of Prints and Drawings, Guide to the Exhibition of Chinese and Japanese Paintings in the Print and Drawing Gallery* (London: British Museum 1888).
- 24 加藤弘子「19世紀末の大英博物館における日本美術展示について—アンダーソン・コレクションによる「中国日本絵画展」」『東京藝術大学美術学部論叢』第5号、2009年、35-61頁。
- 25 *British Museum. Dept. of Prints and Drawings, op. cit.*, pp.34-36.
- 26 小野文子、前掲論文、14-15頁。
- 27 T.J. Larkin, “Japanese Pictorial Art”, *Catalogue of a Collection of Japanese Paintings, Drawings, etc. by the Leading Artists of Japan, from the 9th to the 19th Century Exhibited by Japanese Fine Art Association* (London: Japanese Fine Art Association, 1888), p.3.
- 28 ラーキンは、クリストファー・ドレッサーから聞いた話として、古い漆の価格は高騰しつつあり、日本では6インチ四方の漆が100ポンドを超えることもあるとカタログに記している。*Catalogue of a Collection of Specially Selected Examples of Lacquer, Ivory and Wood Carving, Bronze and Inlaid Metal Work, Pottery, Porcelain and Cloisonné, Paintings and Drawings, Embroideries and Miscellaneous Art Objects, with Notes upon the Same* (London: Japanese Fine Art Association, 1888), p.6.
- 29 Anon., “Notes on Art and Archaeology”, *The Academy* (February 18, 1888), p.124.
- 30 Mortimer Menpes, *Japan: A Record in Colour* (London: A. & C. Black, 1901), pp.78-79.
- 31 Anon., “Art in June”, *Magazine of Art*, 1888, p.xxx.
- 32 Edward Linley Sambourne, “The Japanese School at the Royal Academy”, *Punch, or The London Charivari*, 4 February 1888, p.30. カリカチュアの下には、同年1月25日のタイムズ紙に掲載された「日本の芸術は、この世で唯一の生きた芸術である。〔中略〕まもなく日本は誰もが認める芸術の中心、そしてリーダーとなるだろう」という一文が引用されている。
- 33 イギリスでは、1863年にD・G・ロセッティの弟で、批評家のW・M・ロセッティが北斎についての論考を発表している。W.M. Rossetti, “Japanese Woodcut”, *The Reader*, October 1863, pp.501-538.
- 34 下記文献の記述による。*The Burlington Fine Arts Club: 17, Savile Row, W., Rules, Regulations, and Bye-laws with List of Members* (Westminster: Metchim, 1899), n.p..
- 35 ここでは、BFACで行われた日本美術展の開催年を1881年としているが、同クラブで日本美術がまとまった形で展示されたのは1878年のみであることから、この一文は1878年の展覧会を指していると思われる。Marcus B. Huish, “Introduction”, *Catalogue of and Notes upon the Loan Exhibition of Japanese Art Held at the Fine Art Society's, 148, New Bond Street, London, 1888* (London: Fine Art Society, 1888), p.3.
- 36 大英図書館には、BFACの1887年の蔵書リストが保管されている。*List of Books in the Library of the Burlington Fine Arts Club* (London: Burlington Fine Arts Club, 1887).
- 2000冊に及ぶ蔵書のうち、日本関連の文献は以下のとおり。
- John Leighton, *On Japanese Art*, 1863 (著者寄贈) / W.J. ALT, *Collection. of Japanese Art. Catalogue 8vol.*, 1876 / W. Anderson, *Pictorial Arts of Japan*, 1886 / G.A. Audsley, *Notes on Japanese Art*, 1872 / *Catalogue of Bowes Collection of Japanese Lacquer*, 1875 / Audsley & Bowes, *Keramic Art of Japan*, 1875 / Bethnal Green (Branch Museum), *Catalogue of Japanese Art Collection*, 1876 / Bowes, *Japanese Marks and Seals*, 1882 / T.W. Cutler, *Grammar of Japanese Ornament*, 1880 / F. Dillon, *Facsimiles of Drawings by Japanese Artists*, 1880 / H.F. Holt, *A Japanese “Virgin and Child”*, 1870 / *Murry's Foreign Handbook: Japan*
- 37 F・ディロンが1909年に亡くなったあと、まもなく日本版画コレクションの売り立てが行われている。1回目は1909年11月22日(月)で228点出品、2回目は1909年12月3日(金)で202点出品された。

- Catalogue of Japanese Prints* (London: Sotherby's, 1909).
- 38 サトウのコレクションは、1911年1月24日、25日、26日、27日に行われたサザビーズの競売にかけてられている。一部は林忠正の旧蔵品であったと記されている。*Catalogue of the Private Collection of an Importer of Japanese Colour Prints* (London: Sotherby's, 1911).
- 39 1913年3月3日(月)にサザビーズで日本の版画と版本のコレクション全183点の売立てが行われた。カタログの冒頭に、「大部分が1888年のバーリントン・ファイン・アーツ・クラブで展示された」との記述が見られる。展覧会カタログにテップスの名前で記載されたのは、9点のみなので、その後アンダーソンや他の出品者から作品を購入した可能性が高い。*Catalogue of Japanese Colour Prints and Fine Editions of Japanese Collection of the late H. Virtue Tebbs, Esq. of 56, Kensington Park Road, W.* (London: Sotherby's, 1913).
- 40 アレクサンダーは裕福な銀行家で、ホイッスラーにロンドンの邸宅の装飾や《灰色と緑のハーモニー: シシリー・アレキサンダー嬢》(1872-74年)をはじめとする家族の肖像画の制作を依頼している。
- 41 ヴィクトリア & アルバート博物館には、アレクサンダーの死後に娘たちが寄贈した約6000点の日本の版画を含む美術コレクションが収蔵されている。板橋美也「19世紀末から20世紀初頭イギリスにおける浮世絵版画研究—ローレンス・ビニョンとエドワード・F・ストレンジを中心に」『浮世絵芸術』169号、2015年、34頁。
- 42 展覧会では、出品数は少ないものの、銅版画や石版画も展示された。William Anderson, "Introduction", *Catalogue of Prints and Books, Illustrating the History of Engraving in Japan* (London: Printed for the Burlington fine arts club, 1888), p.v.
- 43 このアンダーソンの視点は、サトウが日本アジア協会で発表した先行研究を踏まえたものである。Ernest Mason Satow, *On the Early History of Printing in Japan* (Yokohama, 1881) (Transactions of the Asiatic Society of Japan, 1881), pp.48-83. および、Ernest Mason Satow, *Further Notes on Movable Types in Korea and Early Japanese Printed Books* (Yokohama, 1881) (Transactions of the Asiatic Society of Japan, 1881), pp.252-259.
- 44 Anderson, *op. cit.*, p.xxii.
- 45 *Ibid.*, p.xvi.
- 46 William Anderson, "Japanese Wood Engravings: Their History, Technique, and Characteristics", *The Portfolio: Monographs on Artistic Subjects with Many Illustrations* (London: Seeley, 1895), n.p.
- 47 『北斎とジャポニスム展—HOKUSAI が西洋に与えた衝撃』国立西洋美術館、2017年。特に、ジュヌヴィエーヴ・ラカンブル「北斎作品はどのように西洋にもたらされたのか」(19-25頁)、マヌエラ・モスカティエッロ「北斎フィーヴァー: 19世紀末の「画狂老人」に対するコレクターの熱狂」(276-281頁)を参照。
- 48 Pierson, *op. cit.*, pp.164-165.
- 49 William Cosmo Monkhouse, "Japanese Xylography at the Burlington Club", *The Academy* (March 3, 1888), pp.157-158.
- 50 *Ibid.*, p.157.
- 51 Anon., "Exhibition of Japanese Engraving", *London Evening Standard* (Monday 20 February, 1888), p.2.
- 52 1888年3月1日に行われたホームの講演は、2年後に一冊の本としてまとめられた。Charles Holme, *The Influence of Japanese Art on English Design* (Warrington: Printed for the the Society at the Guardian Office), 1890.
- 53 *Catalogue of an Exhibition of Japanese Colored Prints and Illustrated Books: At the Rooms of the Grolier*

Club, at no. 64 Madison Avenue, N.Y. April, 1889 (New York: Grolier Club, 1889). 展覧会にあわせて、メトロポリタン美術館の理事などを歴任した弁護士ハワード・マンズフィールドによる講演会が行なわれた。なお、グローリエ・クラブの会員には、チャールズ・ラング・フリーアやジョン・ラファージ、ルイス・カムフォート・ティファニーらが含まれている。Juria Meech and Gabriel P. Weisberg, *Japonisme Comes to America: The Japanese Impact on the Graphic Arts 1876-1925* (New York: H.N. Abrams in association with the Jane Voorhees Zimmerli Art Museum, Rutgers, the State University of New Jersey, 1990), p.44.

54 *Exposition de peinture & d'estampe japonaises, cercle artistique & littéraire de Bruxelles, février 1889*. この展覧会は、ビングとベルギーのコレクターであるエドモン・ミシヨットが協力して開かれた。

55 *Exposition de la gravure japonaise à l'École nationale des beaux-arts à Paris du 25 avril au 22 mai 1890* (Paris: École nationale des beaux-arts, 1890). 1890年にフランスの国立美術学校で行なわれた「大浮世絵展」については、近年以下の研究によってその全貌が明らかとなった。Tsukasa Kodera, Tatsuya Saito, Megumi Soda and Geneviève Aitken, "Reconstructing Bing's Legendary 1890 Exhibition of Japanese Prints at the École des Beaux-Arts", *Journal of Japonisme*, Volume 2, Issue 1 (Jan 2017), pp.1-37.

【資料1】1880年代末にロンドンで開催された日本美術関連の展覧会

〔凡例〕

*作成に際して、以下の文献・データベースに掲載された一覧を参照した。このうち発表者が当時の雑誌・新聞、カタログ等の一次資料を調査し、開催の裏付けが取れたもののみ掲載した。

・ *Exhibition Culture in London 1878-1908*, University of Glasgow <https://www.exhibitionculture.arts.gla.ac.uk> (2019年8月25日アクセス)

・ 小野文子「近代における西洋での日本美術展— [イギリス]」『近代画説』26号、明治美術学会、2017年、22頁。

*開催期間および内容は、前述の一次資料調査に基づき、記載した。

開催年	開催月	展覧会(開催場所)	内容	カタログ
1887	10-11月	東洋の磁器、古い日本の金工、漆等のコレクション展(ダウズウェルズ・ギャラリー)	明朝(1368-1644)・中国清朝の乾隆帝の時代(1736-96)の「古い七宝の磁器」、フランス・プリンクラー大佐のコレクションから「偉大な時代の青磁の瓶」といった中国磁器、「大名に献上するために制作され、青と赤で細やかな筆致の装飾が施された薩摩焼」、18世紀に制作された金工日本コレクション、17-18世紀の漆芸といった日本コレクションなど、全81点を展示。	<i>Collection of Oriental China, old Japanese Bronzes, Lac, etc.</i> (London: Dowdeswell Galleries, 1887).
1888	1-2月	日本美術展(ファイン・アート・ソサエティ)	日本美術のコレクターからの作品貸借による展覧会。出品者には、W・アンダーソン、ピング、T・カトラー、E・ハート、H・アーレンス、A・モリソンら著名なコレクターのほか、L・アルマ=タデマ、F・レイトン、M・メンペスといった芸術家も含まれる。マークス・ヒューイッシュが序文を担当、カタログの編集はヒューイッシュと片岡政行が共同で行なった。出品総数は800点以上あり、「磁器と陶器」、「金工」(甲冑・刀・鏢など)、「木工と象牙細工」(根付・置物など)、「七宝」、「漆芸」、「ブロンズ」、「織物」(袱紗・着物)に分類の上、展示。	<i>Catalogue of, and Notes upon the Loan Exhibition of Japanese Art Held at the Fine Art Society's, 148, New Bond Street, London, 1888</i> (London: Fine Art Society, 1888).
1888	2-3月	中国と日本の絵画展(大英博物館版画・素描ギャラリー)	1881年に大英博物館が購入したアンダーソン・コレクションから選定された絵画作品275点を二部構成で展示。第1部: 絵画(掛幅・卷子・額)には、「10-16世紀の中国絵画」13点、「大和・土佐派」14点、「中国派」25点、「雪舟派」4点、「狩野派」14点、「民衆派」11点、「光琳派」6点、「四条派」27点、「岸駒派」13点など。第2部: 線描画(絵巻断線・扇面画・下図・画帳)は「大和・土佐派」24点、「中国派」11点、「狩野派」9点、「民衆派(浮世絵流)」20点、「四条派」76点など。	<i>Guide to the Exhibition of Chinese and Japanese Paintings in the Print and Drawing Gallery</i> (London: British Museum 1888).

1888	2-4月	日本の木版画の歴史を例示する版画・版本展（バーリントン・ファイン・アーツ・クラブ）	アンダーソンを中心に、会員の版画・版本コレクションを出品。展示総数662点。第1期（9世紀-1608年）・第2期（1608-1680年）・第3期（1680-1710年）・第4期（1710-1765年）・第5期（1769-1825年）・第6期（1825-1860年）・第7期（1860年以降）に分類したうえで、各時代を代表する絵師による作品を展示年代順に紹介。	William Anderson, <i>Catalogue of Prints and Books, Illustrating the History of Engraving in Japan. Exhibited in 1888</i> ([London] Printed for the Burlington Fine Arts Club, 1888).
1888	3月	9世紀から19世紀にかけての日本の一流芸術家による日本の絵画、素描展（ジャパニーズ・ギャラリー）	ジャパニーズ・ギャラリーの経営者T・J・ラーキンが企画とカタログ編纂を担当。9世紀に巨勢金岡が描いたという愛染明王図から、19世紀の渡辺省亭による鴨を描いた作品まで、掛軸を中心に、制作年代順に63点を展示。	<i>Catalogue of a Collection of Japanese Paintings, Drawings, etc, by the Leading Artists of Japan, from the 9th to the 19th Century Exhibited by Japanese Fine Art Association</i> (London: Japanese Fine Art Association, 1888).
1888	5月	日本の掛物コレクション展（ダウズウェルズ・ギャラリー）	横浜にあったドイツ系商社アーレンス商会の創業者H・アーレンス（1842-1886）による掛物コレクション488点。片岡政行がカタログを編纂を担当。1200点を調査したうち、展示したのは約半数。「宅磨派」（3点）・「大和絵と土佐派」（50点）・「中国派」（周文・宗湛・曾我蛇足・椿椿山・谷文晁など）（64点）・「雪舟派」（44点）・「狩野派」（101点）・「浮世絵流あるいは大衆派」（菱川師宣・英一蝶・北斎など）（66点）・「光琳派」（34点）・「四条派」（87点）、岸派（9点）に分類。	<i>Catalogue of a Collection of Japanese Kakemonos on Exhibition at Messrs. Dodeswell's Galleries</i> (London: Dowdeswell Galleries, 1887).
1888	6月	特別に精選された作例-漆・象牙・木彫・ブロンズ・象嵌金工・陶器・磁器・七宝・絵画・織物・多種多様の美術品-展（ジャパニーズ・ギャラリー）	ジャパニーズ・ギャラリーの経営者T・J・ラーキンが企画とカタログ編纂を担当。138点に及ぶ作品は、「漆」（18点）、「象牙・木彫」（12点）、「ブロンズ・象嵌金工」（18点）、「中国の磁器」（27点）、「日本の磁器」（12点）、「七宝」（11点）、「絵画と素描」（18点）、「織物」（7点）、「その他」（6点）に分類され、展示。	<i>Catalogue of a Collection of Specially Selected Examples of Lacquer, Ivory and Wood Carving, Bronze and Inlaid Metal Work, Pottery, Porcelain and Cloisonné, Paintings and Drawings, Embroideries and Miscellaneous Art Objects, with Notes upon the Same</i> (London: Japanese Fine Art Association, 1888).
1890	不明	北斎-素描と版画展（ファイン・アート・ソサエティ）	マーカス・ヒューイッシュが序文を執筆。ビングのコレクションを中心に、『富嶽百景』や『北斎漫画』など、204点を展示。	<i>Catalogue of Drawings and Engravings by HOKUSAI</i> (London: Fine Art Society, 1890).

【資料2】 W・アンダーソンによる「日本の木版画の歴史を例示する版画・版本展」(1888年)

出品作品の時代区分

〔凡例〕

* 下記展覧会カタログ所収、Summary of Period (pp.xxxii-xxxv) の記述をもとに作成。

William Anderson, *Catalogue of Prints and Books, Illustrating the History of Engraving in Japan. Exhibited in 1888* ([London] Printed for the Burlington Fine Arts Club, 1888).

* 絵師の漢字表記は、上記カタログの日本語索引、およびカタログ内の記述を踏まえて記したが、確認が取れなかったものについては、英語表記のままとした。

* 作品の種類や主題についての記述は、なるべく原文に忠実に翻訳した。

時代区分	主な絵師	出品された作品の種類・主題
第1期 9世紀(?)-1608年	—	仏教版画
第2期 1608-1680年	—	初期の絵入り本(未熟な版画)
第3期 1680-1710年	菱川師宣	版本
	奥村政信	版本、一枚絵、色刷木版
	長谷川等雲、石川流宣	版本
	鳥居清信、鳥居清政	版本、芝居について一枚絵、色刷木版
第4期 1710-1765年	橋守国、橋保国、西川祐信、大岡春卜、桜井秋山、月岡丹下	1710-1765年の様々な種類の絵入り本
	鳥居清満、鳥居清長、鳥居清経、富川吟雪	1750-65年の一枚絵(色刷木版)、中編小説の挿絵など
	西村重長、石川豊信、石川豊雅	1730-1765年の一枚絵(色刷木版)など
第5期 1769-1825年	勝川春章とその門下の春好・春英など、一筆斎文調	1770-1790年までの芝居について一枚絵(色刷木版)と版本
	恋川春町、鈴木春信、湖龍斎(礒田庄兵衛)、鳥居清峰、菊川英山、北尾紅翠斎重政、窪俊満、鳥山石燕豊房、歌川豊信	1770-1790年までの一枚絵(色刷木版)、主に女性の肖像画、版本
	細井鳥文斎栄之、北尾政演(京伝)、北尾雅義、喜多川歌麿、歌川豊春	1790-1810年までの一枚絵(色刷木版)、主に女性の肖像画、版本
	葛飾北斎(春朗、宗理、戴斗など)	1790年以降の版本、催旦摺物(New Year's Card)
	竹原春朝斎、西村中和、Hokkiō Nishikuni、丹羽桃溪、速水春暁斎、蔀関月	1780-1800年までの版本、主に地形図
	下河辺拾水	版本、主に物語絵
	司馬江漢	版本、主に物語絵
	歌川豊広、歌川豊国	1800-1825年までの催旦摺物、芝居やその他の色刷木版の一枚絵、に関する版本など
	歌川国貞・歌川国安・有坂蹄斎北馬・魚屋北溪・勝川春扇・勝川春亭	1810年以降の催旦摺物、色刷木版の一枚絵、版本など
	谷文晁	風景画など
	酒井抱一	光琳、光琳派の様式に基づく画帳 ※『光琳百図』のことか

	張月樵	1810-1825年までの色刷版画帳
	森春溪	1810-1825年の色刷木版、主に中国の主題
	合川亭珉和	1810-1825年の絵画の模写
第6期 1825-1860年	葛飾北斎	多種多様な画帳など
	溪斎英泉、玉蘭斎あるいは五雲亭貞秀、柳川重信、大石真虎	1825-1840年の色彩木版の一枚絵（芝居に関するものでない）、版本
	長谷川雪旦、長谷川雪堤	1830-1840年の名所図会
	小田切忠近・松川半山安信・八島定岡	1840-1860年の名所図会
	広重	色刷木版の一枚絵（主に風景画）、版本
	歌川国貞	前に同じ
	歌川国芳	色刷木版の一枚絵、版本
	北洲、北英、北長、貞外、貞廣	芝居に関する色刷木版、大阪派
	菊池容斎あるいは武保	古代の著名人の肖像
	北斎の弟子である北寿、北濤、北馬、北雲、二代目戴斗、柳川重政、沼田月斎、葛飾為斎	1825-1860年の版本
	春灯斎	1850-1860年のヨーロッパの様式で描かれた銅版による風景画など
第7期 1860年以降	河鍋曉斎	1865年以降のあらゆる画帳、主に戯画
	鮮斎永濯	画帳と挿絵本
	梅嶺	鳥と花の画帳
	石田有年、新井藤次郎	銅版画



図1 バーリントン・ファイン・アーツ・クラブ
1921年2月頃、大英図書館

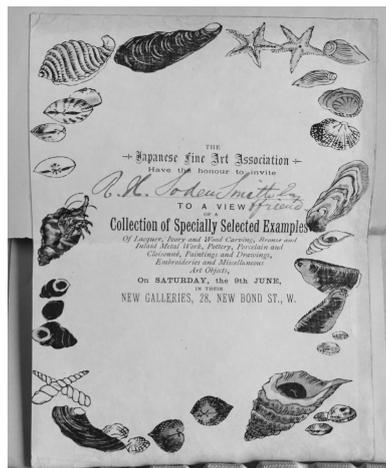


図2 ジャパニーズ・ギャラリーの招待状 (1888年
6月)、ロンドン ナショナル・アート・ライ
ブラリー (筆者撮影)



図3 モーティマー・メンペス《茶の花》1887-88年、
油彩・木材、テイト・ブリテン



図4 エドワード・リンリー・サンボーン
《ロイヤル・アカデミーの日本派》
『パンチ』誌、1888年2月4日



図5 フランク・ディロン《迷い込んだ羽根》1878年、
油彩・カンヴァス、ヴィクトリア&アルバート博
物館



図6 エドワード・ディロン旧蔵 日本の版画ヴィ
クトリア&アルバート博物館版画素描室 (筆
者撮影)



図7 鈴木春信《風流やつし七小町 関寺》
 ※アンダーソン出品作品
 (出典: William Anderson, *Japanese Wood Engravings: Their History, Technique, and Characteristics*, 1895)



図8 奥村政信『遊君仙人』1710年、大英博物館
 ※アンダーソン出品作品

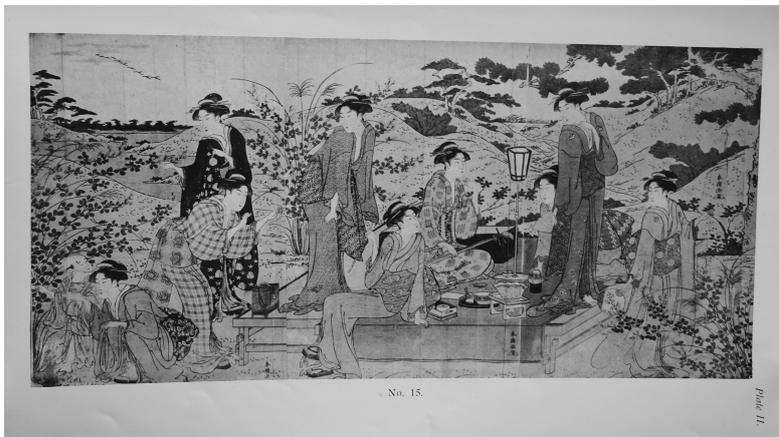


図9 勝川春潮《秋の行楽》
 ※サトウ出品作品。のちにテブスが購入し、彼の売立カタログに記載されている。
 (出典: *Catalogue of Japanese Colour Prints and Fine Editions of Japanese Collection of the late H. Virtue Tebbs, Esq.* (London: Sotherby's, 1913), p. 5.)

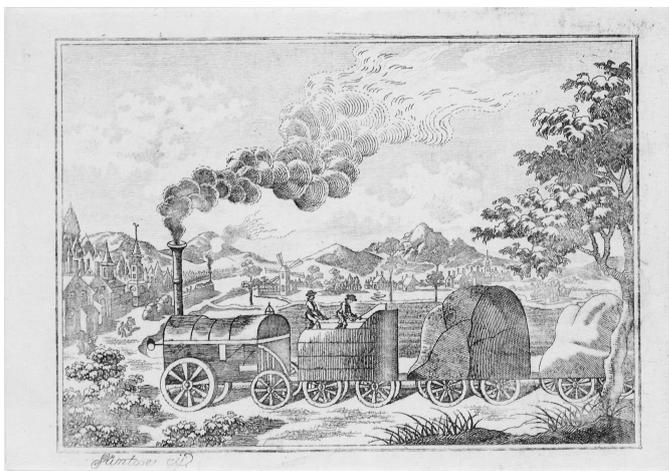


図10 岡田春燈斎の銅版画
 19世紀後半、大英博物館
 ※E・ディロン出品作品